

【2026 ワールドカップ・ミラノ大会 1日目】

開催日：2026 年 7 月 10 日～12 日

開催地：イタリア・ミラノ

ワールドカップシリーズ最終戦となるミラノ大会が開幕した。本大会には 49 か国・地域から個人 89 名、団体 33 チームが出場する。

本大会は、世界選手権前最後のワールドカップであり、各国が本番を見据えた最終調整の場として臨む重要な大会である。

日本からは、フェアリージャパン団体、個人では世界選手権代表の喜田未来乃選手、鈴木菜巴選手が出場した。

個人においては、世界選手権本番を見据え、演技の完成度や得点力を高めるとともに、国際大会の実戦の中で課題を明確にし、本番へ向けた最終調整を行う重要な機会となった。

団体においても、世界トップレベルのチームと直接競い合うことで現在の実力を確認するとともに、演技の完成度や安定性を高め、世界選手権で最高のパフォーマンスを発揮するための最終確認の場として大会に臨んだ。

【個人：鈴木菜巴】

〈フープ〉

得点：22.900 (DB5.9/DA3.2/A7.3/E6.5)

前日のボディウム練習から非常に落ち着いた様子が見られ、試合を重ねるごとにコンディションが向上していることが明確に感じられた。1 種目目のフープも、直前練習では身体がよく動いており、大きな不安なく競技に臨むことができた。

しかし、冒頭の DA で動きがやや不明確となり、続くバランスでも手具操作とのタイミングにわずかなずれが生じた。その後のリスクでは、フープの面がぶれたことで受けを急ぎ、動きにもたつきが見られた。この影響により徐々に音楽とのズレが生じ、その修正に意識が向いたことで、最後のリスクでは普段であれば確実に処理できる場面で落下につながった。

音楽とのズレはリズム減点だけでなく、身体表現やダイナミックチェンジ、フロアの使い方など演技全体の明確さにも影響を及ぼす。シーズン終盤を迎え、各国選手の演技の完成度が高まる中、こうしたわずかな精度の差が各評価項目に反映され、得点差として表れることを改めて実感した。

〈ボール〉

得点：25.650 (DB6.8／DA4.1／A7.35／E7.4)

前回大会（北京）終了後から、投げの高さや転がしの精度、リスクの内容、さらには実施順まで見直しを重ね、本大会に臨んだ。

フープでのミスが影響したこともあり、直前練習ではやや落ち着きを欠く様子が見られ、一瞬自分を見失いかける場面もあった。しかし、自ら課題を整理し、技術面・精神面ともに立て直した状態で演技に臨むことができた。

ボールでは、身体難度・DA ともに明確な実施ができ、エカルテターンやリスクの受けも安定していた。また、一つの DA では予定していた加点を獲得できなかったものの、それ以外には構成の見直しが確実に得点へ反映された内容となった。

今回の演技を通して、**国際基準に基づく厳格な採点**により現在の課題が明確となり、選手自身も世界で戦うために必要な改善点を再認識することができた。世界選手権に向けては、今回明らかになった細部の精度をさらに高めるとともに、この経験を自信へとつなげ、本番で最高の演技を発揮できるよう取り組んでいきたい。

【個人：喜田未来乃】

〈クラブ〉

得点：26.550 点 (DB8.3／DA3.6／A7.250／E7.400)

今大会の 1 種目目ということもあり、全体的に慎重な演技となったが、クラブのわずかな乱れやリズムのずれにも冷静に対応し、大きく演技を崩すことなくまとめることができた。一方で、今シーズンから取り入れているラファエリターンでは踵が落ちてしまい、高得点となる身体難度（DB）が認められず、大きな得点ロスとなった。また、本番では足先の緩みや身体全体のエネルギー不足が見られ、練習時と比較すると動きの明確さや迫力に課題が残った。世界で上位を目指すためには、緊張した試合環境においても最大限のエネルギーを発揮し、演技の質を維持できるよう取り組んでいく必要がある。

〈リボン〉

得点：26.100 点 (DB7.0／DA4.2／A7.600／E7.300)

全体を通して比較的落ち着いて演技を進めることができたが、つなぎの動きの中でリボン操作が予定どおりに行えず、一時的に演技の流れが止まる場面が見られた。その影響から音楽に遅れが生じ、表現動作を十分に実施できなかったことで、技の羅列となる印象を与えてしまった。

また、パンシェターンでは姿勢が崩れ、身体難度が不明確となったほか、難度中に予定していた DA も実施できず、得点を伸ばすことができなかった。

両種目を通して、落下などの大きなミスは抑えられたものの、高得点につながる身体難度（DB）を**確実に取り切ることができず**、得点を伸ばし切れなかったことが課題として挙げられる。世界選手権では、手具操作だけでなく身体難度一つひとつの完成度が勝敗を左右するため、細部まで精度を高め、確実に得点へ結び付けられる演技を目指していく必要がある。

【団体】

〈総合1日目：ボール5〉

得点：26.100（DB6.1／DA6.4／A7.6／E6.0） 9位

世界選手権前最後のワールドカップとなるミラノ大会には、ロシアを除くほぼすべての強豪国が出場し、日本はBグループ2番目に演技を行った。

演技全体を通しては、多くの難度や受けの追加価値を確実に実施することができ、全体としてまとまりのある内容となった。しかし、前転シリーズにおいて1名が手で受ける判断をした後、投げ返しの軌道が乱れたことで落下が発生し、実施で0.7点、難度で0.8点を失う大きな失点となった。また、冒頭のコラボレーション（CR）でも1名の受けが不正確となり、予定していた価値を獲得することができなかった。

一方で、このようなミスがありながらも26点台を記録できたことは、演技全体の質や完成度が着実に向上している証であり、これまで積み重ねてきた強化の成果が徐々に表れてきていると感じられた。

その反面、身体難度の精度や四肢の伸び、投げ受け時の移動など、実施面では依然として改善すべき課題が残されている。世界選手権ではさらに厳しい採点が予想されるため、細部まで精度を高め、減点を最小限に抑えられる演技を目指していく必要がある。

また、今大会では各国とも完成度の高い演技を披露し、27点台後半から28点台を記録するチームが多く見られた。日本は26.100点で、わずか0.100点差で種目別決勝進出を逃す結果となり、世界のトップレベルでは0.1点の積み重ねが順位を大きく左右することを改めて実感した。

現在の日本は、世界の上位争いに加わる力を十分に備えている。一方で、わずかな精度の差が順位を分ける状況でもある。だからこそ、一つひとつの難度や手具操作、実施の質を確実に積み重ね、演技全体の完成度をさらに高めていくことが重要である。

【出場選手】

田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、眞鍋凜